

玄関前のクスノキ

小嶋祥三

以下の文章は京都大学霊長類研究所の50周年に寄せて書いた文章である。クスノキは京都大学の、そして「自由な学風」のシンボルである。それを頭に入れて書いた。2017年1月30、31日に50周年記念のシンポジウムが犬山であった。わたしは以下の文章を一部取り込んで話をした。

わたしは1972年-2003年の間、霊長類研究所（心理研究部門、行動神経研究部門認知学習分野）に在職した。わたしが赴任した時、研究所玄関の前にあるクスノキは移植がうまくいかなかったのか、幹が切られていた。その幹の脇から枝がのびていた。その枝が成長し、現在は立派な樹になっている。

わたしが赴任した時、研究所は1967年の創立後あまり時間が経っておらず、組織、建物などすべて建設中だった。研究所の設置は日本学術会議第4部人類学民族学研究連絡委員会の発議によるという。今西、伊谷らの霊長類のフィールド研究が一つの核になっていただろう。一方で、サルを実験室で研究する領域の重要性も認識され、両者を統合する形で研究所は設立されたのだろう。これらは研究所の一次計画の部門構成に反映されている。

当時は学園紛争の余燼が燻っており、その影響か、あるいは京大の「自由な学風」の反映か、研究所の協議員会には教授から助手まで（昔の職階名で）、教官全員が協議員として参加した。予算は教授、助教授、助手など職階に関係なく、等しい額が配分され、助手も人事権をもっていた。わたしが赴任した年に第一期の大学院生を受け入れたが、大学院生は院生会に属し、部門には属さない、つまり教官に使われる身分ではない、という雰囲気があった。かれらの机は部門ではなく、院生室にあった。すなわち、教官も大学院生も研究者として扱おうとする精神の表れだったように思う。

若かったわたしはこのようなシステムを好ましいものと感じていた。基本的に自分の興味を追求することが許されている、求められていると思った。そしてわたしにとって幸運だったのは、心理部門の長の室伏靖子先生（現在は本吉先生ですが、旧姓で）が若手の研究を援助する方針をとられていることだった。このような室伏先生の指導方針をわたしたち若い助手は十分に認識していなかったように思う。先生がこの方針を口にされたのは、先生が立命館大学へ転出する時だった。わたしたち若手の研究者は室伏先生の庇護のもとで、伸び伸びと研究することができた。このことを今も深く感謝している。

教官の平等を制度的に表現した協議員会は、学園紛争の影響だろうか、しばしば荒れた。当時の議長、近藤四郎所長が「人格を否定するような発言は慎むように」と何回か注意されたことを覚えている。会議が長引いて日を跨ぐこともあった。とくに人事は揉めることが多かった。当時、実験系とフィールド系の間には確執があり、両者の中間に位置する心理部門はその影響をまともに受けた印象だった。しかし、時間が経つにつれ、双方の対立はおさまり、互いを認めるようになってきた。それでも、協議員会や人事がシャンシャンと

「無事に」終わることはなかったと思う。わたしが所長をしている時でも、人事委員会の提案が協議員会で否定されることは珍しくなかった。わたしはこれを全く正常な状態と思っていた。このような中で玄関前のクスノキは育っていった。

わたしは国立大学の法人化の直前に研究所を離れ、慶應義塾大学へ転出した。その後あまり時間は経っていなかったと思うが、霊長研が教官の任期制を導入したことを聞いた。それ自体、わたしは賛成だったので、異論はなかった。問題は、職階によって任期に差があることだった。任期制を導入するならば、教官全員に適用すべきだ。これで霊長研の良き伝統は壊れたと思った。しかし、もうわたしは部外の人間であり、内部の人たちがやりたいことに口を出すべきでないと考え、黙った。ただ、このような道を歩み続ければ、若い研究者は伸び伸びと自分の興味を追求するのが難しくならないか心配だった。協議員会が形骸化し、人事も活気のないものにならないか心配だった。

さて、玄関前のクスノキはいつまでも元気な姿のままにいられるのだろうか？

1月31日の朝、シンポジウム前に研究所に行ってみた。玄関前のクスノキは健在だった。しかし、隣の樹が大きくなり、圧迫され、目立たなくなっていた。このクスノキは霊長類研究所が京都大学に属することを意識して植えられたと思うが、時間が経つにつれ忘れられたのかもしれない。なお、クスノキは宿泊棟や坂を下った隣地との境界にもあった。

2014年9月に旧神経生理研究部門の同窓会があった。その時は塔野地にある30年暮らした宿舎にも行ってみた。このホームページの『犬山の四季』で書いた宿舎入口の見事なヤマザクラは、隣の樹に圧迫され無惨な姿をしており、衝撃を受けた。今年も咲くと思うが、衰れである。